

たまいたま 川柳



稲の実り

2019年
9月号 (No.718)

日川協加盟

巻頭言

吟社催事といひごと

願法みつる

本年5月号誌に発表した美江賞を始め、4・6・7・8の各月号誌の表紙4では、各種の大会や吟社が設定する栄誉賞で、わが吟社のお仲間会員による受賞者を紹介してきた。そのご活躍振りは、誠に喜ばしいことである。

ところで、実にそれら大会や栄誉賞を企画・準備・実施する各吟社の数多の担当者や関係者の、陰の心づくしの程に思いを致すとき、しみじみと感深いものがある。

大会も表彰式も一年一度の催事ではあるが、ここに至りまたその記録を整理する方々の、陰に陽のご苦労のなんと色濃いことであろうか。歴史は、そこに流れた経過や結果を単に字面で記録するが、月日を掛けて流れた涙と汗とは、生身の実感であり、関係者の胸底に深く刻まれている。

業務に携わる人的要員が豊富な吟社であっても、様々な形での苦勞がある筈だ。ましてや、会員の多くが高齢化し勢力が減少している吟社などでは、叶うことなら現今流行りの催事企業や団体に、お任せしてしまいたい程の悩みであろう。しかしそれは叶わないのが現実の柵である。

埼玉川柳社では一昨年、彩栄賞を止めた。そして今年度は美江賞も止めた。「びこう」ってナニの時代でもある。オリンピックと川柳大会。どう結びつくのだろう。

日日是好

願法みつる

五輪とや五七五のチカラコブ

百歳を視野に若さの陸や水

大会に矢張り似合いのメダル類

相応の五欲ちらちら聴く披講

トロフィーや賞状よりもマルが好き